厚生労働科学研究費補助金難治性疾患等政策研究事業
難治性炎症性腸管障害に関する調査研究
分担研究報告書（平成 29 年度）

「クローン病肛門部病変のすべて」の改訂

研究分担者　二見喜太郎　福岡大学筑紫病院外科　教授
東　大二郎　福岡大学筑紫病院外科　講師
平野由紀子　福岡大学筑紫病院外科　助教

研究要旨：診断から治療まで一冊に網羅したクローン病肛門部病変の解説書として、2011 年 10 月に刊行した「クローン病肛門部病変のすべて」は、肛門部の診療になじみのない内科医にも活用できる内容となっている。刊行から 5 年以上経過して、診断的、治療的な研究の進歩により追加すべき新しい事項も増えており、また肛門部癌の増加は早期診断の必要性に迫られている。今回、これらの事項を加えて、さらに実臨床的なものを目指して改訂案を計画し、コアメンバーによる検証が終了、今後 1 年をかけて仕上げる予定である。

共同研究者
杉田 昭(横浜市立市民病院)、舟山 裕士(仙台赤十字病院 外科)、根津 理一郎(西宮市立中央病院)、福島 浩平(東北大学大学院 医工学研究科消化管再建医工学分野・医学系研究科分子病態外科分野)、渡辺 聡明(東京大学 腫瘍外科・血管外科)、池内 浩基(兵庫医科大学病院 IBD センター)、藤井 久男(吉田病院)、楠 正人(三重大学大学院 医学系研究科 消化管・小児外科)、板橋 道朗(東京女子医科大学 第２外科)、前田 清(大阪市立大学 腫瘍外科)、亀山 仁史(新潟大学歯科学総合病院 消化器外科)、高橋 賢一(東北労災病院 大腸肛門外科)、木村 英明(横浜市立大学附属 市民総合医療センター)、水島 恒和(大阪大学 消化器外科)

A．研究目的

クローン病において肛門部は罹患頻度の高い部位で、病変は難治性、易再発性で若年で発症するクローン病の長期経過を左右する重要な因子の一つであるばかりでなく、初期症状として早期診断を導く手掛かりになることもよく知られている。「クローン病肛門部病変のすべて」は 2011 年 10 月に外科系プロジェクト研究の成果として刊行し、肛門部の診療になじみのうすい内科医にも利用されていると考えているが、5 年を経過して、診断、治療における最新の知見ならびに癌合併の増加など、追加すべき事項が増えており、今回、内容の修正に新たな事項を加えて、診断から治療までを一冊に網羅したさらに実践的な参考書の作成を目指している。

B．研究方法（表 1)

現行の「クローン病肛門部病変のすべて」には、64 枚の肉眼所見を含めて診断・治療に関する事項を掲載しており、新しい写真も加えた診断的および治療的な最新の事項の追加および肛門部癌に対する診断内容を増やした改訂案を作成し、5 名のコアメンバーに検証を依頼した。

C．研究結果(改訂の内容)

コアメンバーの意見から、Perianal fistula に対する呼称の変更はその理由を記載することで同意が得られた。AGA 「Perianal fistula」の分類、肛門部診察の体位、金属ブジーは同意により追加記載することになった。病変としては、skin

tag、edematous pile、ulcerated edematous pile の違いが曖昧になっており解説を加えることにした。麻酔下肛門観察(EUA)および生検の意義を解説。Cutting seton と loose seton の手技を具体的に解説、また人工肛門造設および直腸切断術後の合併症についての記載を加えることにした。症例呈示としては、肛門管－膣瘻、尿道瘻の MRI を含めた写真の提供があり加えることにした。その他の写真(肉眼所見)については、軽症例から癌合併まで含めて病態別にさらに整理して選別することにした。

D. 考察

現行の「クローン病肛門部病変のすべて」に不足した事項ならびに新しい知見を加えることにより、診断的、治療的に実臨床で、とくに肛門部の診療に不慣れな内科医にも分かりやすいクローン病肛門部病変の解説書になると思われる。また、肛門部癌はクローン病患者の生命予後を左右する重要な因子であり、症例呈示を参考に早期診断さらにサーベイランスへつながるものと考える。

E. 結論

クローン病において、長期的な QOL の維持に肛門部病変の管理は不可欠であり、一冊の解説書があれば診療科を問わず、より適切な対応につながり、ひいてはクローン病患者の生産性の向上を導くものと考える。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1.論文発表

なし

2.学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

（予定を含む）

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

参考文献

1) 渡辺守、佐々木巌、二見喜太郎:クローン病肛門部病変のすべて－診断から治療まで－、厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服事業「難治性炎症性腸管障害に関する調査研究」. 平成 23 年度研究報告書別冊, 2011.10.

2) Irvine EJ. Usual therapy improves perianal Crohn’s disease as measured by a new disease activity index. J Clin Gastroenterol 20: 27-32, 1995

3) Sandborn WJ, et al. AGA technical review on perianal Crohn’s disease. Gastroenterology 125:1508-1530,2003

4) Taxonera C, et al. Emerging treatments for complex perianal fistula in Crohn's disease. World J Gastroenterol 15:4263-4272,2009

5) Marzo M, et al：Management of perianal fistulas in Crohn's disease: an up-to-date review. World J Gastroenterol. 21:1394-1403, 2015

表1.「クローン病肛門部病変のすべて」－改訂内容－

原本の修正 ： Anal fistula [痔瘻 → 肛門周囲瘻孔]
治療指針 [H28年度改訂版 Seton法図説 PDAI]

追加 図・表 ： 直腸指診の体位
Fistulaの分類(AGA)・ 金属ブジー など

追加・差し替え候補 ： 軽症例 ・ 先行例
特徴的所見
小腸病変に起因した肛門周囲膿瘍
UCからCDへの診断の変更（契機となった肛門病変）
Fistulectomy(瘻孔切除術)後の経過
Seton法（手技 ・ 継続 ・ 不良なSeton）
Bio投与例の経過
人工肛門（切断術適応 ・ ストーマ部の再燃）
肛門部癌（肛門所見 ・ 内視鏡）